ていることであり、領主軍や一揆軍の編成、装備、戦闘法、兵力、戦況などが比較的詳しく書かれている。

しかしこの特色にも問題がないわけではない。なかでも「初期市民革命」という概念の使用については抵抗を覚える読者も少なくないであろう。概説書である本書の性格からして、それについての詳しい論証がないのは致し方がないとしても、訳者が巻末に付している学説史的解説を読んでも、疑問は解消しない。また一揆軍の敗北の理由を穏健派指導者の裏切りに多くを負わせている叙述も、平板に過ぎる印象を免れない。訳文は、一、二不適切な箇所も見出されはするが、全体としてよくこなされ、読みやすい。

（B6版三一六頁　昭和四四年三月）
（未来社刊　定価九〇〇円）

（中村賢二郎）

小牧実繁先生古稀記念事業委員会編
人文地理学の諸問題

本書は副題にもある通り、昭和十三年から七年余り京都帝国大学文学部地理学教室の主任教授を務められ、戦後は滋賀大学教授及び学長として数多くの研究と後進の指導に尽された小牧実繁博士の古稀を記念して、その門下生によって執筆・刊行されたものである。

収録された論文は四十の多きにのぼるため、その一々について詳しい内容を紹介することは出来ないが、分野別に執筆者と内容を簡単に概観してみたい。

まず、地理学史・方法論では、村上次男氏がコスモグラフィアの系譜とその地理学への結実について、野間三郎氏が地理学における形態学的方法と生態学的方法の展開について、別技篤彦氏が『ジャワ誌』の著者ラッフルズがジャワ副総督時代に行ったジャワ研究について、室賀信夫氏が日本の古代伝承中の神々の遍歴記事に見られる地理的記載について、辻田右左男氏が近世国学者に見られる優れた地理学的識見と地理思想について、河地貫一氏が離島研究における文化・経済の発展過程決定者としての人間社会の重要性の認識について、中田栄一氏が地域建設への地理学の応用方法について、それぞれ執筆した論文がある。

地図学史に関しては、日本のものでは、海底地形図作製史についての川上喜代四氏の論文があり、外国のものでは、明末清初の耶蘇会士作製の漢文世界地図のうち、A・シャル・フォン・ベルとM・ブノワのものについての海野一隆氏の、マルチン・ベハイムの地球儀についての織田武雄氏の、一六八七年のシベリア地図についての三上正利氏の論文がそれぞれある。

集落地理の論文では、細井淳一氏が静岡市近郊村の近世―明治初期の土地利用形態について、堀川侃氏が昭和四十二年の名古屋市の転出入人口について、村松繁樹氏が第二次大戦後の礪波散村の耕地整理等を中心とした近代化について、島之夫氏が西欧諸国の家屋について、小林博氏が滋賀県における京都の影響圏について、西村睦男氏がクリスターラー的エリア構造に関する諸批判について、それぞれ執筆している。

経済地理の論文では、岡本啓志氏が山梨県のリンゴ栽培と発展と現況について、大島襄二氏が日本の真珠養殖業について、土井仙吉氏が西日本主要漁港の勢力変動について、藪内芳彦氏が東南アジア諸国漁業が抱えている共通の問題について、内田秀雄氏が金沢・高岡・長浜仏壇工業の特色と発

展の宗教的背景について、春日茂男氏が衰退産業地域の発生と代替産業導入の問題点について、川崎健史氏が滋賀県瀬田大萱工業団地の計画調査について、川端弘氏が湖西高島郡の綿織物工業地の生産基盤と企業系列化の問題について、松下清雄氏が人間生活にプラスやマイナスの影響を与える様々な宗教について執筆している。

次に文化・民族地理の分野では、宮畑巳年生氏が滋賀県下の山間二集落における宮座とその内部での家格について、岩田慶治氏が主としてインドシナ半島諸民族のカミや精霊に関する観念について、米倉二郎氏が水稲作起源地に関する学説展望について、石川栄吉氏がオセアニアのマルケサス原住民の食生活について、石田寛氏がオーストラリアの白豪主義の形成と変貌について、それぞれ論文を執筆している。

歴史地理の分野の論文としては、日本に関するものでは、縄文式時代の沖積地質学的編年についての神尾明正氏のもの、関東・中部地方における鎌倉街道の分布と遺跡についての河部正道氏のもの、地割から見た江戸城下町の成立についての柴田孝夫氏のもの、紀州の藩政村名の分類とその分布についての近藤忠氏のもの、「土佐州郡志」による藩政村の形態と規模についての山崎修氏のもの、古西近江路に沿う穴太部落の歴史交通地理学的性格についての藤岡謙二郎氏のものがあり、外国に関するものとしては、中世西ドイツのフランク植民と街村プランに関するニッツ説の検討についての水津一朗氏のものがある。

また、地誌的分野の論文としては、木村憲治氏の琵琶湖内の中之湖の変貌についてのものと、浅井辰郎氏のアイスランドの文化と気候変化についてのものがある。

以上の諸論文のほかに、巻末には小牧博士の年譜と著作目録とが付せられ、前掲の門下生の論文の多彩さと共に、博士の学徳の広さを余す所なく示している。

（B5判五二六頁　昭和四三年一〇月　大明堂刊　定価三、八〇〇円）

（須原芙士夫）

BEITÄGE ZUR GENESE DER SIEDLUNGS- UND AGRARLANDSCHAFT IN EUROPA

Rundgespräch vom 4. Juni bis 6. Juli 1966 in Würzburg veranstaltet von der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Geographische Zeitschrift, Beihefte, Wiesbaden 1968.

ここ一〇年間、ヨーロッパの集落・農業地理学者は、数次にわたる国際的な共同討議をこころみてきた。本書は、ナンシー（一九五七年）、ヴェドステナ（六〇年）、バーミンガム（六四年）についで、一九六六年六月にヴュルツブルクで開催された研究の内容を収録したもの。

イギリスのA. R. H. Baker「中世ケントにおける農地」は、中世史料を厳格にふまえて、ミッドランド農地との相違を立証したもの。フランスのP. Brunet「バスノルマンディにおけるボカージュ」、Fr. Gay「カムパーニュ デュ ベリの景観と経済」、A. Meynier「ブレトンの地条」、J. Peltre「一六―八世紀のロレーヌにおける測量法」、X. de Planhol「ロレーヌ農村集落の北限」